



熟練の技で造り出す伝統の刃物

タン、タン、タンと、一定のリズムでベルトハンマーが打ち下ろされ、真っ赤に熱せられた鉄の形が徐々に整えられていく。打ちつけられる度に火花が飛び散り、職人の顔には玉の汗が浮かぶ。

土佐打刃物は自由鍛造による職人の世界。鉄や鋼の塊から、ハンマーひとつでさまざまな形の刃物を造る。型がなく、注文によって自由に形を変えて打つからこそその自由鍛造である。その分職人に求められる技量のレベルは高く、熟練を要する。一朝一夕で身に付くものではない。

土佐山田町植にある「世ノ本鍛工所」の世ノ本貢（39歳）さんは、父の跡を継ぐべく、14年前に鍛冶師の道に入った。

「まだまだ未熟。父のやり方を横目で見ながら、手取り足取り教えてくれるわけではないので」

世ノ本さんは苦笑しながら言う。「父に聞く話では、斧おのでも鉋なたでも、昔は造れば造るだけ売れていたそう。いまは需要も減って、注文を受けて造るとい感じですよ」

もともと農林業用の道具として発展してきた土佐打刃物だが、林業の衰退や機械化の波によって、本来の役割だった山からの需要を失いつつある。しかし、切れ味鋭くしかも丈夫なその品質は、使う人の心をつかんで離さない。そしてその品質が生きる場は、何も農林業だけではないだろう。その魅力を的確に伝えさえすれば、まだ見ぬ多くのユーザーに出会えるかもしれない。

例えばキャンプを愛する人たちだ。

土佐打刃物



キャンプ

キャンプを愛するカフェ店主の提案

いま、キャンプの波が来ている。キャンプを楽しむ人々はもともといたが、近年さらなる広がりを見せ、老若男女問わずにたくさん愛好者を獲得している。高知でも、アウトドアブランドのスノーピークが運営するキャンプ場がオープンするなど、大きなブームを呼んでいるのだ。

さて、香北町永野に「オーチョ」という古民家カフェがある。10年前に大阪府から移住してきた西奥起一さん（50歳）が、妻の栄利子さんとともに営んでいる。

西奥さんもキャンプを愛する人の一人。その西奥さんが2年前に立ち上げたのが、「オーチョキャンプ」というキャンプ用品のブランドだ。気さくな笑顔で、西奥さんが近年のキャンプ事情を教えてくださいました。

「キャンプを楽しむ人々には、使う道具にこだわる人が多い。最近の傾向は『見せるキャンプ』。おしゃれなキャンプアイテムを集めて、こだわりの詰まった空間としてキャンプサイトを演出しています」

西奥さんはもともと京都の美術大学に6年間勤め、アートの世界に身を置いていた。その関係から、ものづくりに携わる知人が多いという。

「職人が作る骨太なキャンプ道具を、一つひとつ丁寧に売り出していく仕事を始めようと。せっかく香美市に店があるのだから、やるからには、地元の土佐打刃物を生かした道具を絶対に作りたいと考えていました」

キャンパーたちの胸に響く土佐打刃物のアイテムとは。西奥さんが思いついたのは片手で扱える斧だった。

